

横浜美術館の美術情報センターについて

松永真太郎 | 学芸グループ長、主席学芸員

1. 構想の経緯——美術館開館前

「美術情報センター」は元来、横浜美術館内の特定の施設の名称ではなく、横浜美術館の「みる」「つくる」「まなぶ」の三つの機能のうちの「まなぶ」を司る部署の名称であった。

横浜美術館開設に先立ち、外部識者等によるさまざまな委員会・会議が設置され、10年あまりの時間をかけて館の基本構想や機能が固められていったことは、当館副館長の柏木智雄が著した「横浜美術館のはじまり」（本書別稿）に詳述されているが、ここではまずそのなかでの美術情報センターに関わる議論の内容を、簡単にまとめてみる。

1) 横浜市文化問題懇談会構想会議（昭和54（1979）年度設置）

全8回の懇談会のうち3回目において、「図書館と組み合わせた情報センター的機能」が提起されている。おそらくこれが「情報センター」という言葉が公的な場で発せられた最初の機会だと考えられる。美術館開館に先立つこと10年、構想のごく初期の段階からこうした機能の必要性が謳われていたことがわかる。

2) 横浜市美術館基本構想委員会（昭和56（1981）年度設置）

6回にわたる会議がもたれた基本構想委員会のなかで、近現代美術に関する情報の提供・活用促進の必要性が指摘され、その議論を踏まえて委員会が策定した「美術館の理念」全5項目のうち（3）において、「美術資料（美術作品及び関連資料、以下同様）の収集、展示、保存、研究及び美術の教育、普及並びに美術情報センターとしての機能をそなえた美術館」と、美術館の機能のひとつとしての「美術情報センター」が明文化された。さらに昭和57（1982）年3月策定の「横浜市美術館の基本構想のあり方について 答申」（以下、「答申」）において、「美術文化に関する情報機能は、今日の美術館に求められている最重要課題の一つ」という視点から、美術情報センターは「教育的機能」＝生涯学習の場、「情報機能」＝世界の美術動向に関する情報収集と提供、「コンピューターの活用」＝内外の研究者、作家、市民に公開するために構築されるシステム、という諸機能を担うべきものと位置づけられる。同じく重要な機能として目出しされた「子供のアトリエ（現・子どものアトリエ）」とならび、「美術情報センター」を横浜美術館の機能上の要件として特出したことは注目に値する。

3) 横浜市美術館設計条件研究委員会（昭和57（1982）年度設置）

2)で策定された「答申」を踏まえ、横浜美術館の諸機能および設計要件を定めることを旨としたこの委員会において、美術情報センターの機能と業務内容についてより具体的な整理がなされた。その「横浜美術館設計条件研究委員会 報告書」（1983年発行）に記された美術情報センターの機能は、以下の6項目に要約できる。

①収蔵品に関する情報の管理、②美術教育（美術情報の提供）、③図書管理・閲覧サービス、④問い合わせ対応（レファレンス）、⑤創作支援のための情報提供、⑥研究支援のための情報提供

以上のような各段階での検討を経て、美術情報センターの機能と施設の具体的な計画が固められていった。最終的に、美術情報センターが二つの施設に分かれて活動する計画となったことは、昭和61（1986）年末に作成された「美術情報センター構成図」〔図01〕により確認できる。二つの施設とは、美術専門の図書室である「美術図書室」と、美術に関する映像コンテンツや文字情報をPC端末やモニター等で提供する「情報ギャラリー」（美術館開館時の正式名称は「美術情報ギャラリー」）である。

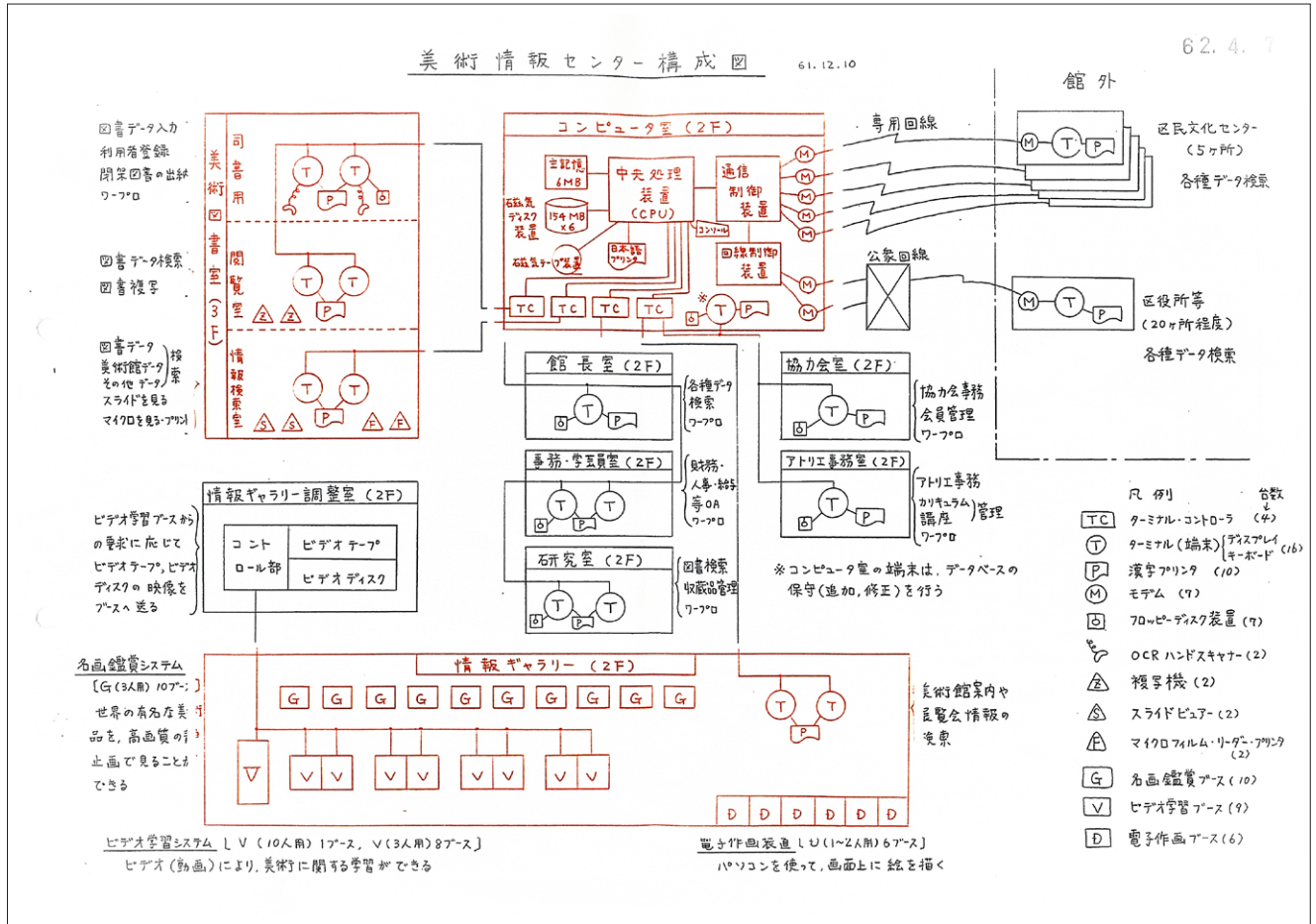


図01 美術情報センター構成図 (昭和61(1986)年作成)

2. 二つの施設——美術館開館当初

平成元(1989)年に開館した横浜美術館には、建物南側の3階に「美術図書室」が、2階正面入り口の左手に「美術情報ギャラリー」が設置された。開設当初における両施設のハード、ソフトの概要および特徴を以下にまとめる。

○美術図書室〔図02〕

面積:935平方メートル *開架室(閲覧席数47)、閉架書庫2、マイクロ資料室。

収蔵資料:図書およびカタログ4万801冊、逐次刊行物678タイトル *収蔵資料数は平成3(1991)年度末時点。開館時

の図書・カタログ収蔵数は約3万冊。

美術図書室についてまず特記すべきは、そのスペースの大きさであろう。900平方メートル超という面積は、もちろん一般の公共図書館に比肩するものではないが、美術館付帯の図書室としては国内に類例のない規模であった。天井高も展示室並みで、白を基調とした壁、天井、椅子と、ダークグレーを基調とした書棚と閲覧テーブルとで構成された内装は、硬質さと重厚感が強調されていた。

図書資料についても、美術図書室としては国内屈指の質量の蔵書が開館時点で整備されていたと言える。3万冊を超える図書（ほとんどが美術関係）とカタログに加え、国内外の芸術系の雑誌は、バックナンバーを含めて主要なものはほぼ網羅し、またマイクロフィルム資料の閲覧機能も整備されていた。美術と図書を愛好する市民にとっては、ハード、ソフト両面でこのうえなく贅沢な環境であったろう。

来室者へのサービスとしては、図書資料を閲覧に供するだけでなく（ただし館外貸出サービスはない）、レファレンス（問い合わせへの対応）というかたちでの情報提供にも力を注いでいた。図書館施設においてレファレンスは不可欠な機能だが、当館開館当初の美術図書室における問い合わせの対応内容は、とりわけ多岐にわたっていたようである。横浜美術館が最初に刊行した年報（平成元（1989）－同3（1991）年度の開館後3カ年の活動実績を集約）で、美術図書室のレファレンスの対応について具体的事例が列記されているが、そこには

—東方三博士の贈り物は、絵画表現上、それぞれの贈り主が固定しているのかどうか？

—1985年のサザビーズオークションに出品されたゴッホの作品名は？

等々、図書室の蔵書はおろか、当館の事業や収蔵品とも直接関連のない質問が散見される。開館前の美術館基本構想委員会で提言された「生涯学習の場」、「世界の美術動向に関する情報収集と提供」というこの施設の趣旨に基づき、地方都市のいち美術館という立ち位置を超え、文字どおり「美術」に関する「情報」の「センター」たるべく開設された施設だったことが、このレファレンス対応事例からも推察できる。

○美術情報ギャラリー〔図03〕

面積：359平方メートル

収蔵・提供コンテンツ：ビデオライブラリー約500タイトル、名画映像レファレンス約7500件、美術情報システム *収蔵数はいずれも平成3（1991）年度末時点。

前述の美術図書室が、図書をはじめとする紙媒体の資料を中心に美術情報の提供を行うスペースであるのに対して、画像を媒体とした情報を集積・提供していたのが、美術情報ギャラリーであった。具体的には以下3種の提供システム/コンテ



図02 美術図書室（平成元（1989）年、開館時）



図03 美術情報ギャラリー（平成元（1989）年、開館時）

ンツが整備されていた。

1) ビデオライブラリー

美術関連の映像番組（約500タイトル）を提供。収蔵番組のほとんどは市販の美術番組を視聴権付きで購入したもののだが、横浜美術館が独自で制作したオリジナル番組（「横浜ゆかり作家シリーズ」等、計二十数番組）も含まれていた。

二人掛けソファをともなう視聴ブースが8基設けられ、それぞれのブースのソファ脇に100円玉を投入し、検索画面から任意の番組を選択すると、別室に設けられた自動送出装置（収録メディアは光ディスク300枚およびS-VHSビデオ304巻）によってモニターに番組が映し出されるというシステムであった。またそれとは別に、多人数視聴用のブースもあり、そこでは都度、展覧会の内容に沿ったプログラムが常時上映されていた。

2) 名画映像レファレンス

国内外の著名な絵画作品の高画質静止画像（約7500件）を提供。室内の壁面に沿って設置された10基のブースで、国内外の名画を、作家名/作品名/所蔵者名/テーマ別セレクトコースを通して検索し、各ブースのパソコンにストックされた作品画像をモニターで閲覧するシステム。ビデオライブラリーと同じく有料で、30分100円。

3) 美術情報検索ターミナル

美術館の収蔵品・書誌情報だけでなく、他の美術館やギャラリーの展覧会情報等を蓄積した「美術情報システム」を提供。検索端末は美術情報ギャラリーに2台、美術図書室にも2台設置された。

美術情報ギャラリーに配されたこれらの大掛かりなシステムと筐体は、いささか仰々しい設えと造形感覚にバブル期の時代感を色濃く浮かび上がらせると同時に、横浜美術館の主要機能の一翼を担う施設として、そのハード、ソフトの整備にいかんにか力が注がれ、巨額の費用が投じられたかを物語っている。

3. 2度のリニューアル——美術館開館以降

平成元（1989）年の開館から令和2（2020）年の改修工事による休館にいたる30年余、この二つの施設を舞台とした美術情報センターの活動が順調に継続・発展してきたとは言いがたい。実際の活用状況や時代のニーズにあわせ、組織体制、提供内容、そして施設名称も含め、少なからず紆余曲折があった。ここでは、その期間に生じた2度にわたる施設再編（リニューアル）について振り返ってみたい。

1) 平成11（1999）年度：美術情報ギャラリーのリニューアル

美術情報ギャラリーのこの最初のリニューアルでは、室内で最も大きなスペースを占めていたビデオライブラリー視聴用の筐体8基を撤去し、代わりに簡素な視聴ブース4基を設置した。併せて番組自動送出装置も撤廃され、視聴希望のあった番組を受付カウンターでVHSデッキを通してブースに送出するというアナログなシステムに移行し、それにともない視聴料が無料化された。提供するコンテンツ（美術番組約500タイトル）に変更はなかった。

一方、美術情報検索ターミナル（美術情報システム）については、美術情報ギャラリー、美術図書室いずれも端末を2台から4台に増設したうえ、インターネットに接続され、来室者がネット上の情報を自由に入手できるようになった。同時期に美術図書室でも、蔵書管理システムを入れ換え、書誌データベースをインターネットで公開する等、システム面の更新が行われている。

このリニューアルは、その内容に照らせば大きく二つの状況認識に基づいて行われたと考えられる。一つは、機器とシステムの陳腐化である。映像メディアというものはおよそ10年スパンで新たなものにとって代わられるのが常であるが、このリニューアルもまさに開館から10年の節目で行われた。若干時代遅れな雰囲気醸成しつつあったブースをシンプルなものにする

と同時に、台数を減らし、あえて自動装置を人的オペレーションに変更した背景にはおそらく、大きな躯体のブースと、それが占有するスペースの大きさに比して稼働率が低かった、という事情もあったと思われる（もし利用者が多い状況であったなら、視聴受付の人的対応への切り替えは困難と判断されただろう）。

リニューアルのもう一つの趣旨は、いよいよ本格的に到来したインターネット時代への対応であったろう。室内各所の検索端末でインターネットに接続できるようにしたことに加え、書誌データベース（ビデオライブラリーの番組リストを含む）をネット上に公開し、館内外で当館の蔵書検索が可能となった。インターネット付きの携帯電話がまだ普及していなかったこの時期において、館内でインターネットを自由に使用できるのは、利用者にとって大きなサービスだったと言えるだろう。

2) 平成17(2005)年度：美術情報ギャラリーの廃止、美術図書室のリニューアル、名称変更

平成17(2005)年4月に2回目の大幅なリニューアルが実施される。美術情報ギャラリーの設備を美術図書室内に移設し、施設名を「美術情報センター（図書／映像／情報）」〔図04〕に改編するというものであった。

美術図書室には、旧・美術情報ギャラリーで提供していた映像・情報コンテンツがまるまる移設された。従来の開架スペースの受付カウンターと閲覧席の一部を削減・縮小して10畳分ほどのスペースを設け、そこにビデオライブラリーと名画映像レファレンスの視聴ブース計4基、他館の展覧会チラシを配架するラック等を配置。加えて、前年（平成16(2004)年）に運用がスタートした「美術図書館横断検索（ALC Search）」（首都圏の国公立の大規模美術図書室が連携して立ち上げた、蔵書横断検索システム）専用の端末も設置された。

筆者もこのリニューアルの計画と実施に直接携わったが、この計画が浮上した背景には、美術情報センターにおける二つの施設に分かれての活動が、この時点で十分に機能していないという美術館としての状況認識があったと記憶している。とりわけ美術情報ギャラリーは、美術館正面入り口脇の「一等地」と言える場所にありながら、それに見合うほどに利用されていないのが実情であった。またこの時期には、日本の美術館において「ミュージアムショップ」と「カフェ」の重要性が叫ばれはじめていた。横浜美術館においては当時、ミュージアムショップは美術情報ギャラリーよりもやや人目につきにくい正面入り口の右脇に所在し、カフェについては存在すらしていなかったため、美術館内の好立地にショップを移設し、あわせてカフェを新設することが検討されていた。こうした諸要件を踏まえて、美術情報ギャラリーの撤廃、その跡地へのショップとカフェの開設へといたったわけである。

この館内施設再編は、美術館総体として見れば、館活動の機能性とスペース効率を高めるものだったと言えよう。一方で美術情報ギャラリーの立場から見れば、自らの居場所を追われ、その機能を美術図書室内に付与するかたちで吸収併された格好であるが、ポジティブな捉え方をすれば、これまで館内に分散していた美術情報コンテンツを一つのスペースに集約することで、複合的な学習、情報収集を可能とし、サービスの機能性と場の活用性を高めるためのリニューアルでもあった。その観点に立てば、施設名称を「美術情報センター」に変更したことも、つまりはこれまで「機能」であり「部署名」であった美術情報センターに、ようやく「施設」としての実態が付与された、と合理的に受け止められるものではあった。

このリニューアルにおいて最も効果的だった改変は、美術館中央の展示室棟と、図書室の所在した南の棟



図04 美術情報センター（図書／映像／情報）にリニューアル（平成20(2008)年撮影）

とを隔てていた鍵付きの扉を撤去し、コレクション展示室から美術情報センターに直接アクセスできる自動ドアを設けたことであろう。この入り口により、美術館来館者のほとんどを占める展覧会来場者が気軽に美術情報センターに入室できるようになり、必然的に来室者数の大幅な増加をもたらした。その反面、展覧会の集客力がそのまま入室者数に反映されるため、大規模な展覧会においては、図書や映像を見る目的をもたない来室者が増え、図書室にふさわしい静かな環境を維持するのが難しくなるという課題も生じた。

また、この動線の開通がもたらしたもうひとつの効能といえるのが、美術情報センターの活動と展覧会との連動性の向上である。リニューアル後は、開催中の展覧会の内容とリンクした蔵書の特集や映像プログラムが頻繁に企画されるようになり[図05]、展覧会鑑賞後のプラスアルファの愉しみと、さらなる学びのきっかけを提供する場となった。以後、図書資料の特集展示の取り組みはさらに強化されていき、平成23(2008)年度以降は企画展またはコレクション展に連動した特集資料展示が恒常的に実施されるようになった。

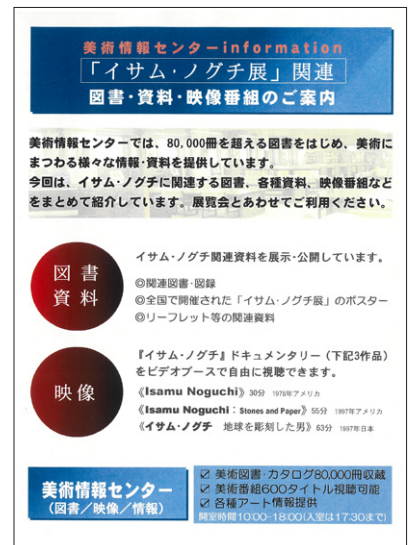


図05 美術情報センター(図書/映像/情報)による「イサム・ノグチ展 世界とつながる彫刻」関連資料の案内のチラシ(平成18(2006)年)

4. おわりに——美術館再開館に向けて

本稿では、開館前の構想から開館後の2度のリニューアルまでを中心に、「美術情報センター」の変遷をたどった。美術館開館前の構想において美術情報センターの役割に過大とも言える比重が置かれ、期待が寄せられた一方で、開館後にそれに見合う人的体制の整備や予算措置がなされず、サービスの質量、利用者数が伸び悩んだ。それゆえ、その活動は年を追うごとに、そして組織改編とリニューアルを経るたびに縮小されていったというのは、否めない事実だろう。

加えて、2000年代以降の社会的動向として決定的だったのは、美術を含む多種多様な映像コンテンツと情報が、インターネット等を通じて誰でも、どこでも入手できるようになったことである。開館前の構想会議において美術情報センターに託された「情報機能」や「コンピューターの活用」といった役割が、この20年のうちにほとんど意味をなさなくなってしまったのである。

映像やデジタル情報を美術館内で提供する必然性が徐々に薄れていったのに対し、図書資料については、美術図書室時代(平成元(1989)–同16(2004)年度)から美術情報センター時代(平成17(2005)–令和2(2020)年度)を通して一定の需要を維持してきた。図書もまた文字情報と映像(図版)で構成されたメディアに違いないが、図書でしか得られない情報は今なお膨大に存在するし、もとより本というメディアには固有のたたずまいや触覚的な魅力、そして美術との相性のよさがあり、それが固定ファンを保持しているゆえんだろう。

改修工事を経た当館のリニューアルオープンまで、いよいよ秒読み段階に入っている。このリニューアルにあわせ、施設名称を再び「美術図書室」に戻すことが決まった。施設としては原点回帰とも言えるが、「美術情報センター」の名はこれにより組織図からも施設図面からも消滅することになる。名称変更の背景には、先述したような「情報」をとりまく環境と位置づけの変化もあるが、なにはさておき、来館者にとってわかりやすい名称であることを重視したということに尽きる。とはいえ無論、旧来の情報センターの諸機能、映像コンテンツやデジタル情報の提供は、図書室の活動の一部として継続する予定である。

また、このリニューアルに際して、美術図書室のロケーションが南の棟の3階からその下の2階へと移設される。平成17

(2005)年のリニューアルにおいて設けられた展示室直結の出入り口は再びなくなり、アクセスは館の外からのみとなるが、美術館のファサードの一角に立地することとなるため、美術館の外への発信力と、誘客の期待度は高まる。その環境変化に対応して、蔵書についても「美術愛好家や研究者でない一般市民も気軽に読める入門書や、親子で楽しめる本も増やしていこう」「いやいや、もとより研究者や美術愛好家向けの専門書自体、開館以降、十分に購入できていなかったもので、そちらを充実させなければ……」等と議論しながら、図書の購入と閲覧スペースの再整備に注力している。

専門性(美術館の専門職員、外部の研究者や美術を学ぶ人の研究支援)と一般性(不特定多数への美術へのいざない)の両立は、この美術情報センター設立当初から標榜されてきたものであり、美術情報センターの名称がなくなるこれからも、その点については不変であろう。これまで以上に、その両極それぞれの層にどのように訴求し、有効なサービスを提供していくか。目下、司書を中心に新たな「美術図書室」の絵姿を思い描きながら、再開室に向けて準備を進めているところである。